

TEKNA

(こどもたち)

2009 DEC. クリスマス号

坂下千郷

イエスのご誕生

ルカによる福音書 2 章 1 節－7 節、10 節－12 節

そのころ、皇帝アウグストゥスから全領土の住民に、登録をせよとの勅令が出た。これは、キリニウスがシリア州の総督であったときに行われた最初の住民登録である。人々は皆、登録するためにおのおの自分の町へ旅立った。ヨセフもダビデの家に属し、その血筋であったので、ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。身ごもっていた、いいなずけの MARIA と一緒に登録するためである。ところが、彼らがベツレヘムにいるうちに、MARIA は月が満ちて、初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせた。天使は言った。「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町であなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。あなたがたは、布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」

イスラエルの歴史をみると、ダビデ、ソロモンの時代に王国の発展と繁栄を窮めたものの、その後数百年に渡って絶えず大国の支配下におかれ、ユダヤの人々はその侵略と支配に長い間苦しんできた。新バビロニア帝国（バビロン捕囚）、ペルシャ帝国、ギリシャ系セレウコス朝シリア（マカバイの反乱）、そしてローマ帝国の支配と、時代を超えて、貧困と重い苦役による人々の深い苦しみと嘆きは、絶望の淵にあった。聖書にある住民登録の勅令は、ローマの政治的権力支配を象徴するものであり、そんな時代の中、イエスは誕生された。

ところで毎年クリスマスの頃になると、イギリスのサンタクロースのおじさんと親しまれている C.ディケンズを思い出すが、彼の作品である“オリバー・トゥイスト”の中にも赤坊誕生の^{くだり}行がある。

—着物次第で人間はどうにでもなる、とよく言うが、赤坊オリバー・トゥイストこそまさにその適例であった！これまでは毛布がかけてあったから、彼は貴族の子供といってもよし、乞食の子供といってもよかった。どんな偉そうな人間でも、この子を知らなければ、それが社会のどの身分に属するべきかを決め兼ねたことだろう。ところがいまや、何度も何度も使い古さえて黄色くなったキャラコ（キャラコ）の古着を着せられてみると、ただちにはっきりレッテルを貼られてしまい、身分をはっきり決定されてしまった—救貧院生まれの孤児と。—

この小説の時代背景は 18 世紀後半イギリスで起きた産業革命により、新興の商工業の資本家（新興ブルジョア階級）が台頭し、社会には資本家と労働者という関係が生まれた。資本家

(雇用側)はできるだけ安い原料でできるだけ安い労賃で加工し、できるだけ安い価格で売るのが最も合理的な方法と押し進め、その下で働かされている多数の貧乏人の労働者の惨めな生活については、知らん顔であった。つまり弱肉強食の搾取による資本主義社会が築きあげられたのだ。そんな時代に黒煙で汚れたイギリス、ロンドンの貧民街で、オリバーは産声をあげた。

イエスの誕生の時代には政治的支配者が、オリバーの誕生の時代には経済的支配者が、少数の強者となって、勝手に社会を動かし、巨万の富を握り、弱者の貧しいものはより貧しく彼らの思いと尊厳は無視されて、踏みにじられたのだ。

さて、我々の生きている現代の状況はいかかなものか？

20世紀になって、高度な科学技術の進歩は、ハイテク産業を生み出し、さらに経済を発展させた。本来貧困を解決すべき経済成長は、富める者を一層富ませ、経済格差はますます拡大するばかり。しかし脹らみ続ける大衆消費社会もとうとう音をたてて崩れだしたのだ。物質的豊さと利便性の高い生活様式の恩恵に与ることはその影でどれ程大きな犠牲をはらみ、またその代償がどれ程高いものなのか、知っている者はどれ程いたのであろうか。弱者とは弱い立場に置かれた人間ばかりではない。共存共生すべき生物種、そして生ける者の足場である地球そのものが人間のエゴによって弱者となり、無惨にも傷つけられている。今世界で経済が悪化する中で、環境破壊、気候変動、地球温暖化、大災害の兆し、食糧危機、飢餓、種の絶滅危惧...と余りに沢山の問題が深刻化し、危機に瀕している。これらは結果がどうなるかをほとんど知らずともせず、近視眼的に行ってきた付けであり、人間がつくりだした問題なのだ。1つの小話がある。

神様が地球のみんなの願いを聞いてくれるという。

「家族みんなが金持ちで幸せに暮せますように。」と人間が願った。

神様は木や鳥やすべての地球上の生き物の願いを聞くと、

「人間が地球からいなくなりますように。」—

人間も捕食されながら、狩猟採集の生活を営んでいた時代は、自然と融合して暮していた。

そして人間は作物を栽培し、家畜を飼うことを知ると、しだいに文明を築きはじめた。

その文明の発展は自然に依存しながら、自然を支配し、食べ物にしていった。火というのは、文明を支える大きなエネルギー源である。人間は火を使うことで金属を加工し、道具からやがて武器をつくった。火の燃料は木々を燃やすことから始まり、やがて石炭を掘り、石油を発見した。人間は森林を伐採し、地球を掘り続け、動物たちは寝所を追われた。

荒地を耕すにはもちろんのこと、ローマ時代には、「すべての道はローマに続く」と言われたように、道路をつくるためにも広く森林は切りたおされた。また18世紀後半に起きた産業革命の原動力も石炭に依存し、そのおかげでロンドンの町の空は黒煙で染まった。そして現代は石油の取り合いで世界戦争にまで発展している。地球の資源は有限であることは知られている。しかし、何億年も先のことだろうと高を括ってきたのではないか。しかし、弱者の悲鳴が地響きを立てて鳴り響きだした。ではいったい人間は何を見間違がえてきたのだろうか。ここでレビ記19章9節-10節から引用したい。

穀物を収穫するときは、畑の隅まで刈り尽くしてはならない。収穫後の落ち穂を拾い集めてはならない。ぶどうも摘み尽くしてはならない。ぶどう畑の落ちた実を拾い集めてはならない。これらは貧しい者や寄留者のために残しておかねばならない。私はあなたたちの神、主である。

我々人間は自然のシステムというものを見失ってきたのではないか？地球上の生き物は弱肉強食であってはならない。自然のシステムとは、食物連鎖の関係でもって、生きとし生けるものは互いに生かされているのではないか。大きいものは小さいものの生命をいただいて、生かされている。

我々はひとりでは生きていけない。まわりの生命の恩恵を受けて生命を継いでいる。この自然のシステムこそ、神様が天地を創造されたときの御意志ではなかったか。アメリカ先住民の諺に「我々は地球を祖先から譲り受けたのではない。子孫から借りているのだ。」とある。我々は安易にただ経済の景気回復を解決策としてはならないと思う。我々が今回復しなければならぬのは、人間と自然（地球とすべての生き物）との互いの関わり合いを回復し、奪い合うのではなく、補い合う関係をもって互いに尊厳仕合うことが大切であると思う。

今年のクリスマスは、聖書に「神はその独り子をお与えになったほど、世を愛された」ヨハネ伝 3:16 とあるように、神の御意志を再認識するときにしたいと思う。

Merry Christmas !

Joyeux Noel